

りらくインタビュー

足立千佳子

まちづくりコーディネーター
(NPO法人まちづくり政策フォーラム理事・
NPO法人せんだいブチファーム理事・事務局長)



高校時代、親の転勤で札幌に転校。だがやはり仙台がいいと、大学時代は1人暮らし。今は好きな民俗学と結びついたまちづくり活動に励んでいる。

「マチツクラー」を名乗る足立千佳子さん。各地を飛び回って、地域の宝を見つける活動に励んでいる。ワークショップを開いたり、みんなで調査したことを冊子にまとめて広めたり。大学でもっと民俗学を研究したかったという思いが原点だ。今はその気持ちを全開にして、興味をひかれることに何でも挑戦、活躍の場を広げている。

—結婚を機に大学での研究を諦めたそうですが。

大学卒業を待たずに21歳で結婚し、すぐに子供が生まれて子育てに追われました。でも私としては正直いつか志半ばで家庭に入ったという感じです。東北学院大学の史学科に入り民俗学を専攻していました。卒業したら大学院に行つてもっと専門的に勉強したかったし、教員の免許もとりたいかった。予定はいろいろあったんです。そういう思いを全部放り出して、家庭優先の生活になりましたね。

—10年後、地元学から道が開けてきました。

嫁ぎ先が岩切で、舅・姑は土地の風習を大事にしていた人です。いろいろと話を聞いて、聞き書きを始めました。お正月のしきたりとか岩切の歴史とか、書いたものを学院大の先生に持っていいたら、それは生きた民俗学だから是非やりなさいといわれたんです。意を強く

地元のよさと課題を発見する

まちづくり活動。

「もっと知りたい」を

形にしていくのが面白い。

して続けていたら、仙台市史特別編の民俗の編集が始まり、現地調査コーディネートをやらないかという話が来たんです。この話ならあのこのじいさんが詳しいですか、ちよと町内で神事のお祭りがありますか、この家で建前やりますとか連絡して現地調査に入るという活動をしました。その次は地元学です。民俗研究家の結城登美雄さんが地元学を提唱していました。宮城野区がその講座を開催し、平成8、9年に私も受講しました。舅・姑だけでなく、いろいろな人に民俗学的な話を聞きましたね。岩切は中世からの街道があって、その石碑が山の上に残っています。ということは、昔はそちらが本道で、今の町は後から切り開いてきたんだと分かったり。すこしく面白かったですね。

—まちづくり政策フォーラムに参加することになりますね。

そんな活動をしているうちにまちづくり政策フォーラムの理事の方と知り合って、「ひたかみ」という情報紙作りのためにコピーの切り貼りなんかを手伝ってくれないかと声をかけられました。そのくらいならできるとOKしたら、情報紙を作るには取材もしなきゃいけないということになり、エーツ(笑)。まちづくり政策フォーラムというのは、都市計画や農政、環境、行政などを研究している大学の先生方を中心にいろいろなメンバーが集まり、地域住民と一緒に調査研究してまちづくりや政策提言に活かそうというグループ。まちづくりのことを勉強しなくちゃいけないんです。

初めの頃で印象に残っている取材が無葉沼。無葉沼まっくらぶの方に、そちらの取り組みを教えてくださいと軽い気持ちで聞いたら、まず来て見てもらいと言われて、行きました。12月の寒い時にずっと立ったまま、ガンたちがねぐら入りするところを観察しましたよ。あ、

あそこは何がいるわって教えてくれるんですけど、私にとってはみんな黒い鳥。あなた、そういうことも分からずに来たの？なんて言われながら、いろいろな人の活動を取材して情報紙に書きましたが、勉強になりましたね。

—まちづくり政策フォーラムの仕事が自分のテーマと近づいてきたとか。

1年も経たない内に、無償ボランティアから有償で働くスタッフになりました。空いていたポストはたまたま事務局長。平成11年です。私は民俗学の中で相互扶助がどういうところから生まれてくるのかずっと興味があったんです。私が中学生の時に宮城県沖地震がありました。住んでいた南光台は新興の住宅団地で、両隣ぐらいいは知っているけど、通りが一本遠えはもう知らないという地域。ライフラインがやられましたけど、たまたま私の家だけ水道が流れたのはなしになったんです。そしたら、どこで聞いたかたたくさんの人がお水下さいと来ました。その内、お皿を洗わないで済むようラップ



みんなが得意分野を生かして何かをする、
結果を見える形に作る、他の人に手渡して使ってもらう、
その過程全部がまちづくり。面白いですね。



バスマップ作りで利用者とともに講座を開く。

を敷いて使うといいとか、いろいろ生活の知恵を教え合うようになって、その様子が子供心にも印象深く残ったんです。

大学に入って水権とか扶助組織とかを勉強すると、水を求めていろんな人が集まるのって、あの地震の時の状況が原点かなと思えました。まちづくり政策フォーラムの仕事がそういうことともつながり、自分の興味あるテーマ、勉強したいテーマができました。

難しい研究を分かり易く展開することを心がけていますね。

まちづくり政策フォーラムは平成11年に任意団体からNPO法人になりましたが、私はNPOって何、まちづくりって何というところから育ててもらい、また好きなようにやらせてもらえたのがありがたかったですね。

NPO法人になって最初の仕事が仙台市の

まちづくり企画コンペに応募した「仙台の自然ふしぎ発見おもしろガイド」作りです。メンバーの先生方は「里山保全の問題点の調査研究」で申請しようということでした。でもその内容は難し過ぎて。それで私は、何も知らないお母さんが見て子供に仙台の自然を伝えるためのガイドにしよう、空から見た仙台を絵地図にして、動物や植物のイラストを入れた楽しいものを作りました。その過程で、イラストを描いてくれたり、自然に関する知識を教えてください、いろいろな人に助けてもらいました。物事は一人ではできないんだ、それぞれの能力が集まるからいいものになると分かりました。私がやれるまちづくりってこういうことなんだなと思いましたね。

それから七ヶ浜町で行った「阿川沼めま学校」も面白かったですね。県は水質が悪化した阿川沼の保全対策事業を行いました。地元住民にも沼に親しんでもらおうとワークショップを開催。私たちが請け負って阿川沼マップも作りました。子供たちと一緒に水質の調査をしたり、地元で海苔養殖をしている方が提供してくれた海苔と米でご飯を食べたり。この海苔とご飯を作るために、阿川沼の水が必要なんだ、きれいにしなくちゃいけないんだということも分かってもらいました。翌年は汐見台小学校の子供たちが沼への排水路にヘチマを植える活動にと発展しました。最初は沼が臭いと県に苦情をいうだけだった住民が、生活排水も影響を与える」と知り、自分の環境を守る当事者になったんですね。そんなきっかけを作る仕事にやりがいを感じます。

田んぼの生き物調査をしている内に、意外に知らない魚や虫がいたりして私たちも地元住民も再発見の驚きや面白さがありました。そこで自分たちの周囲にある池や小川や水路の環境と生き物たちをよく知るための生態系学習カード「おみずなかんけい」を平成15年に作りました。真面目なテーマを楽しく勉強したいと思つてこんな名前をつけました。魚やカエルや虫などのイラストに説明も入れた19枚のカードで、ジョーカーもあります。これはトランプの神経衰弱やババ抜きのように遊べるんです。モツゴのペアはシナイモツゴです。半年ほど「おみずなサロシ」も設けて大人も子供も一緒に遊びましたよ。これは自前の費用で1000セット作つて配りました。学校の先生も使つてくださっています。水辺の環境を考える



まちづくり活動を「形」にしたガイドブックやマップなど。

「おみずなかんけい」というカード遊びもあるそうです。

田んぼの生き物調査をしている内に、意外に知らない魚や虫がいたりして私たちも地元住民も再発見の驚きや面白さがありました。そこで自分たちの周囲にある池や小川や水路の環境と生き物たちをよく知るための生態系学習カード「おみずなかんけい」を平成15年に作りました。真面目なテーマを楽しく勉強したいと思つてこんな名前をつけました。魚やカエルや虫などのイラストに説明も入れた19枚のカードで、ジョーカーもあります。これはトランプの神経衰弱やババ抜きのように遊べるんです。モツゴのペアはシナイモツゴです。半年ほど「おみずなサロシ」も設けて大人も子供も一緒に遊びましたよ。これは自前の費用で1000セット作つて配りました。学校の先生も使つてくださっています。水辺の環境を考える

来た仕事は何でも興味を持って取り組んでいます。
仕事の組み立てを考える時は、
どう自分が分かるようにするかというのがモノサシですね。

りらくインクビュー



よく立ち寄る活動拠点の1つ、仙台市民活動サポートセンター。

ワークシヨップでも、小川で取って来た生き物を
カードで調べてみたり、活躍しています。

——仙台のバスマップも作りましたね。

平成12年くらいから公共交通を市民の目で
考えようと分科会で研究していました。バス路
線やダイヤの組み方という大きな課題は別と
して、複雑な路線や運行状況を分かり易い地
図にすれば、少しは利用者が増えるかなと、
地図の読めない私でも分かる形でガイドブック
を作ろうということになりました。これまで

の集大成として平成18年の仙台市環境局のコン
ベンに提案、バス利用者が増えれば「酸化炭素
が減って環境を守ることになるとの狙いで「ピ
コエコパスブック」を作りました。その前身が

平成12年に作った「1000円バスマップ」。仙台
市公共交通推進課から受託しました。1000
円バスも当初は中心部を特別の循環バスが
走っていると誤解する人もいましたが、どのバ
スに乗っても区間内は1000円だと知ってもら
い、バス利用を勧めるためのものです。事業者で
はできない、利用者の目で作ったマップというこ
ころがポイントです。これらの知恵を将来、助
成金に頼らずビジネスにできたらいいなと考
えています。広告を入れ、出版社とタイアップ
して売りたいものです。

——様々な分野で大活躍ですが、苦労し
たことは？

地元の人とのワークシヨップで、期待した反
応がなかったり参加者が批判的だったりする
こともあり、そんな時はどうしたらいいか悩み
ますね。私たちは行政と契約して仕事をしま
すが、事前の説明が不十分だったりすると、斜
に構えられてなかなか信頼関係が築けず、ファ
シリテーター（参加者の体験・気づきを促す触
媒のような働きをする進行役）の役割がうま
く果たせないこともあって辛いですね。それで、
そういう時はどうするか、何が問題か、誰がキー
パーソンか瞬時に見抜こうとするようになって
きました。また、地域に根付いて活動してい
る人たちに、ここに住んでみなければ分からない
よといわれたこともあります。だから葛藤も
ありました。泣いて帰ってくることも。

でもそんな経験のおかげで私も変わりました。
最初の頃は褒められたかったんです、自分

はいいことだと思ってるから。その上、白黒
はつきりしないといやでした。自分は絶対正し
いと思ってるので、自分の意見に無理やりで
もはいと言わせたかった。でもそうではないん
です。いろいろな人がいていろんな意見があっ
て、それぞれが自分の人生の主人公だから尊
重しなくちゃいけないということが身に沁み
て分かりました。たくさんの方が集まった時、
私は水先案内人として舵をとれば、みんなの
力でどこかに行き着くんだと、何年もワーク
シヨップをやつてきて自信になりました。だか
ら最初うまくいかなかったも悔でなくてゆっく
り構えるという態度が身につきました。私は
あちこちに出かけていつてきかけ作りをする
そして地元の人たちが当事者として自分の町
を作っていく。それが私の仕事だ。

——今後は市民農園フチファームに力を入
れたいとか。



せんたいフチファーム富田農場で野菜作りも楽しむ。

私、元々は土いじりも虫も嫌い。
でもプチファームで遊んでいる内に、ミミズが出てくると、
働いてくれてるね、ご苦労様って思うようになりました。



足立 千佳子 (あだち ちかこ)

1965年仙台生まれ、1986年東北学院大学中退。1996年宮城野区地元学受講をきっかけにまちづくりに興味を持つ。1999年NPO法人まちづくり政策フォーラムに入社、各地で地域環境やまちづくりに関するワークショップを開催し、小冊子やガイドブックなども制作。2007年NPO法人せんだいプチファーム設立、理事・事務局長となり、グリーンツーリズムにも力を入れる。

中山間地域の耕作放棄地の有効利用を考え、実践的に研究しようと、平成12年から太白区坪沼でプチファームを開設しました。その内に地元のお祭りにプチファーマーが参加するようになったり、今度は地元の人達が栽培指導型農園を始めるようになったり。プチファームは研究より純粋に野菜作りを楽しんでいる人も多いため、市民農園を中心とした農のある暮らしを実現するNPO法人「せんだいプチファーム」として去年8月に独立しました。独立後、栽培指導型農園を太白区富田に開設し、プチファームは現在3カ所になりました。プチファームのいいところは、いろいろな体験ができるネットワーク。近くの農家の人が野菜作りを教えてくれるのもそうだし、丸森町の筆甫や栗原市若柳でグリーンツーリズム活動をしている人たちとも交流があり、会員は出かけて行って、こんな農のやり方、暮らし方があるんだと刺激を受けています。そのおかげで、味噌作りとか豆腐作りなど畑以外の体験もいっぱい楽しんでいます。この間は富田農場の共有区画で大根が豊作だったので、急に切干大根作りを企画したりして。

仙台の100万人が農のある暮らしを体験できるようにしたいですね。あちこちにプチファームを作って上に親しむのもいいし、そこにレストランも作って野菜を食べながらみんなまで話すのもいいし。街の人たちも自分の足元にある生態系を知り、そのおかげで自分たちの命も育まれているということを感じてもらえるようなプロジェクトを提案していきたいなと思っています。